

金融の本来の役割としての 責任投資

りそなアセットマネジメント株式会社
代表取締役社長

西岡明彦 CMA・CIIA



尊敬する運用会社の社長（アライアンス・バーンスタイン 山本社長）と意見交換をしていたとき、話はESG投資になった。山本さんいわく、「形から入る人が多いんだよね」。

確かにそうだ。フィデューシャリー・デューティー（FD）のときも同じだった。「大場さん（前日本証券アナリスト協会会長、現日本投資顧問業協会会長）は本物だから、「FD」という血が流れていたが、多くの人はFDを語っていても「儲け」という血が流れているんですよね」。

以前のSRI投資は、リターンを犠牲にするイメージもありフィデューシャリー・デューティーから否定的に捉えられていた。確かにESGファクターも優位な超過収益は現在のところ確認できていないのだと思う。しかしながらESG分析を非財務情報の分析と読み替えればどうだろう。アクティブ運用の世界では、非財務情報の分析は必須だし、現在の株価に織り込まれにくい故に、この分析の優劣が長期的なパフォーマンスに大きな影響を与えることは容易に想像できる。りそなの株式運用も2000年初頭からESGインテグレーションとは呼んでいなかったが、非財務情報の分析は明確にプロセスに組み込まれていた。他の運用会社も非財務情報の分析を組み込んでいたところがあることは予想できる。

コダックと富士フイルムの例でよく語られているように、アナログか